

研究会通信

第26号平成16年5月15日
特定非営利活動法人教育研究所・不登校問題研究会
〒233-0013 横浜市港南区丸山台2-26-20
TEL 045-848-3761(代) Fax 045-848-3742
http://member.nifty.ne.jp/KYOKEN/

平成16年度夏期セミナー第14回教師&専門家のための不登校問題研究会 開催日程がきまりました！今年は東京会場に加えて大阪会場でも開催します。

★大阪会場／よみうり文化ホール（大阪府豊中市新千里東町1-1-3）

★日程：平成16年7月27日（火）～7月29日（木）

★東京会場／国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都渋谷区代々木神園町三番一号）

★日程：平成16年8月23日（月）～8月27日（金）

平成15年度夏期セミナー第13回 教師&専門家のための不登校問題研究会 講★義★概★要★&アンケートより

■「少子・高齢化時代における子育て支援」ー子どもの自立と参加を考えるー

鈴木 雄司 厚生労働省雇用均等・児童家庭局環境課児童健全育成・児童環境づくり専門官

児童虐待の相談件数は平成13年度23274件にまで達しているという。児童を取り巻く現状は深刻化している。今後一層進む少子化、高齢化、子どもが育つ環境が整わない社会構造、多くの問題を含んだ現代社会の問題を取り上げ、国の施策を示しつつデータに基づいて解説していく。

- 家庭科教育を高校生に行っていて、少子・高齢化の問題は次世代の子ども達へいつも話しているが、国の対応について、このところ大変後手に進んでいる感があり、本日のお話で少し本来の意図がわかったというか、ますます進んでほしいと願う。（東京都・教員）
- 少子化とよく言われるが数字で説明していただきよくわかった。また50年後の推計値に不安を感じた。赤ちゃんと接する機会を積極的に取り入れる必要を感じた。（新潟県教員）
- 縦軸・横軸の関係で社会情勢がわかり、中央での考え方がよくわかったが、地方でのお役所仕事との関係が少し理解することができた。縦軸（時間軸）で長期計画を出されているが、地方の役所では毎年とっていいほど人が変わっていて大丈夫かなあという不安もあります。（滋賀県民間施設）
- 物事を長いスパンで考えていくことが必要であると感じた。幼児とのふれあいはお互いに得るものがある。（神奈川県教員）

■不登校問題調査研究協力者会議による『今後の不登校への対応の在り方について』（報告）について

小林 万里子 文部科学省 初等中等教育局児童生徒課課長補佐

不登校問題調査研究協力者会議による『今後の不登校への対応のあり方について』という報告書が提出された。その中で不登校への対応にあたって①将来の社会的自立に向けた支援の視点、②連携ネットワークによる支援、将来の社会的自立のための学校教育の意義・役割、④働きかけることや関わりを持つことの重要性、⑤保護者の役割と家庭への支援という5つの視点が示されている。それに基づく学校の取り組みのあり方、きめ細かく柔軟な対応とは、などについて文科省の施策も交えて解説していく。

- ちょうど学校に届いたリーフレットのお話で、気になっていたことなので興味深く、しっかりメモを取りました。かえって現場の同僚たちに報告するつもりです。（岡山県教員）
- 勤務が保育園のために自分で情報を得ようとしなければ文科省、小学校のことは詳細にわかりません。今回、縦軸にそった、子どもの将来にどう教育環境が作られていくか、知りたかったので、不登校という視点からの取り組み方、対応の仕方が概ねわかったように感じます。うまく表現できないが、厚生労働省と文科省の教育部門の壁はまだまだ小さな穴程度でしょうか。（東京都保育士）
- 不登校を問題としてとらえるからには、学校に登校すること、学校という場に登校するに値する場でなければならないという基本部分を再認識できた。今後、スクールカウンセラー、医療機関と教育現場の密接な関係をつくることの重要性を感じた。不登校に対する柔軟な対応、考え方、ケースバイケースであることを確認できました。（東京都教員）
- 報告書をじっくり読もうと思う。施策が具体的に学校教育に生かされていけば素晴らしいですね。小中学校の連携は大切であることは

充分感じるが、やはり幼児期からのつながりも大切になってくると思う。(静岡県保育士)

■「不登校追跡調査から見てきた今後の対応のあり方」 森田洋司・大阪市立大学大学院教授

不登校の子供のタイプは多様であり、個別にしかも試行錯誤的に教員が関わることになる。その際には、校長、教頭や周りの教員の理解が重要となる。

大人から見れば、つまらないことやささいなことで、学校などとの「つながりの糸」が切れてしまうように見える今の子供でも、「耐えるに足りること」があれば今の子でも耐える。

その「耐えるに足りること」とは、▽学校・学級・友人関係への愛着▽集団内で自分が役に立ち、自分の存在を確保できるもの・こと▽自分の欲求を満たしてくれるもの・こと——などだ。

今の子供たちは、今、つきあっている友達に合わせるといった傾向が強く、「自分の内面の中だけの自分らしさ」は持っている。集団、例えば学級の中で、自分の存在を確保できるようにすることが、「学校とのつながりの糸」を強くする上で特に重要だ。

- 従来の心理学からの視点に加え、社会の動きの中で不登校を考えるきっかけになったと思う。興味深く聞かせていただきました。(神奈川県学生)
- 小学校の勤務なので、進路についてあまり問題意識を感じていなかったが、将来を考えたとき、大変重要な問題だと感じました。大人になってひきこもりになるとは大変なことだと思いました。(新潟県教員)
- 親しみやすい話し方で、前の小林さん(文科省)のお話しがさらに深いところまでわかりました。(岡山県教員)
- 初めて先生のお話をきくことができました。社会学は面白い。著書「不登校現象の社会学」から勉強を始めます。パワーをいただきました。何回も何回も先生の話を知りたいです。(岩手県相談員)

■「不登校・ひきこもり・入社拒否をめぐる」 倉本英彦 北の丸クリニック所長・社団法人青少年健康センター常任理事

ひきこもりは病名ではない。不登校と同じくひとつの状態像である。不登校だった児童生徒が中学校を卒業して学籍がなくなりひきこもりとなっていく。このようなケースがひきこもり人口のおよそ半数ほどになるのではないか。ひきこもり 100 万人時代といわれているが、現実にある程度把握できている数字では日本人の場合約 1000 人に一人程度であろうと思われる。

またひきこもり問題は、教育と医療、福祉の狭間的領域であり、所轄の官庁が特定できない。民間を含め様々な団体が乱立しているが、しっかりとした

対策が施されていないのが現状。

ひきこもりからの社会参加においては、まず生存能力をつけさせること。何かに依存してでもとにかく生きていくという意味での生存能力である。そのためには家事などを含めた身の回りのことができるようにしていくこと。それが活動意欲につながり外に出て行くエネルギーになっていく。

- 男女のひきこもりの差についてまだ何となくですが理解することができてよかったです。(福岡県教員)
- 実践・研究の両面を組み合わせるとのお話で大変わかりやすかった。質疑応答の時間を与えてくださり、質問に答える形で話が深まり、よかったです。(長野県教育委員会)
- 両親の係わり合い、母親の接し方などの対応の仕方によって改善されることが多いという点が参考になった。(神奈川県の方)
- 不登校・ひきこもり・入社拒否は本質的には同じ事態であるということがわかりました。それだけに不登校を安易に考えるわけにはいきません。不登校をつくらないための方策などお考えをお聞かせいただきました。(岡山県相談員)
- ひきこもりに対する見方が変わりました。対応の仕方が少しわかった気がします。(神奈川県教員)

■シンポジウム「僕たちが不登校になった理由」 コーディネーター 池上 彰

主森君は小学校高学年から不登校気味、中学 1 年生から不登校。教育研究所に通いそこから高校進学。現在高校 2 年生。樋口君は中学 1 年生から不登校。教育研究所から定時制高校を経て現在大学 3 年生。墨田君は小学校 5 年生の終わりから不登校。その後中学校も引き続き不登校。中学 1 年生の終わりから教育研究所へ、現在浪人中の 19 歳。という 3 人のパネラーを相手に、NHK 週刊子どもニュースのキャスターである池上彰氏が様々な角度から話を聞いていく。不登校になった原因、子どもから見た先生への期待、子どものタイプによって違う先生の登校刺激のポイント、ネットゲームとの付き合い方、動き出したきっかけなどを聞いていく。さらに会場からの様々な質問に子ども達が答える。

- 気持ちが分かって涙が出てきた。やはり方程式はないことを実感したと共に、そばにいるものが状況を見ながらトライしてみることは自分が常に思ってきたこと。自信を得た。都会には施設があり、恵まれています。地方には無いので、対策を文科省で不公平の無いように作ってほしい。(静岡県教員)

- 池上さんの人間性のすばらしさから、3人の不登校経験者も肩を張ることなく素直に話せることができたのではないだろうか。不登校の生徒達が今後生きていく上で、その期間無駄でなく有意義だったと自信を持って言っていたが、私の周りの不登校の生徒にも同じことが言えるようにもっていける様努力したい。(福岡県相談員)
- 私がかかわっている不登校の子ども達からはなかなか聞くことのできない本音を聞くことができ、大変よかったですと思います。また池上キャスターの話の進め方を拝見して、子どもの気持ちを聞きだす質問のポイントもわかりました。(千葉県教員)
- 一人一人の思いがわかり、何を考えていたのか何を望んでいるのか見えてきた。本当に一人一人違い、対応も多様なかかわりが必要と感じた。墨田君をみて、園に通って来る親にも聞いて欲しいと思った。(神奈川県教員)

■「不登校の心理分析と再登校への援助方法」

国際学院埼玉短期大学教授 金子 保

増加がとまらない不登校の要因は適切な予防策が伝えられていない。いじめっ子は徹底的に指導しなければいけない。しかし、たくましさも育てなくてはならない。今の子ども達はトラブルの解決能力が育っていない。好きで遊んでくれて怖い人である父親のかかわりをはじめ、幼稚園、保育園、学校でもたくましさを育てる工夫が必要である。適応指導にも誤りがある。登校刺激は与えず、発達に必要な状態にいるから、不登校は自主性にかけているから本人に任せる必要があるという考え方がある。しかし、それが正しいとは思えない。登校刺激は必要であり与え方の工夫が大切。教育相談員の任期も短すぎる。相談員のレベルが上がらないという問題点もある。

意欲を育てやる気を出させる具体的指導法をしめしながら学校のかかわり、家庭のかかわりの大切さを示していく。

- 色々なケースを紹介していただき、大変わかりやすかった。小さいころの大切さを再認識しました。あと算数のわからない子にどうやって教えるかがとても楽しかったです。ポーリングを使った方法は試してみたいです。(福岡県教員)
- 多くの臨床をもとに話され、具体性があり、これからの活動にいかせそうな部分が多かった。(静岡県教員)
- 当意即妙な講義で的確で早い対応により困難も簡単に解決するのだと理解できました。先生の話の中で、こんなに時間と労力を費やして、やっと再登校にこぎつけたといった事例も聞かせてもらえないでしょうか(滋賀県教員)
- 具体的な指導法をその都度例として挙げられていて、よく理解できた。今日の講演の中で紹

介されなかった事例についても特に一番教師がいじりにくい医療型の不登校についてじっくり聞いてみたいと思った。しかし、今日のお話を参考に前向きに取り組んでみようと思った。(大阪府教員)

■「YG検査に見る、タイプ別指導のあり方」

牟田武生教育研究所所長、不登校問題研究会幹事

「昨年度文科省不登校児童・生徒の適応指導総合研究委託」で同研究所と関わりひきこもり状態が改善し、YG検査(性格特性を見る心理検査)が可能で123人を対象に、社会参加できたかどうかなどの過去12年間の経緯を性格のタイプ別に分析した。平成4年(文科省協力者会議答申“どの子にも起こりうる”)の前後を過渡期として、それ以前を登校刺激期、それ以後を受容期の3期におおまかに分けた。性格のタイプは、▽A=情緒安定、平凡▽B=情緒不安定、自己抑制にかけると非行などの問題▽C=行動・社会面は内向的、消極的・おとなしい▽D=リーダータイプ▽E=情緒不安定、行動・社会面は内向的。

その研究から、受容期にあたり本来なら不登校にならないはずのCタイプの子が不登校になるという。

いわゆる“明るい不登校”の増加があり、不登校の数全体を引き上げたと考えられる。5つのタイプが情緒安定の方向に変容することで、社会参加が可能になること、タイプ別にピンポイントの対応が可能であることが分かった。さらにひきこもりは3年以上経過すると社会参加率が下がることもこの研究から分かってきた。現在、タイプの判別と対応方針のノウハウをパソコンで診断できるソフトの開発を進めている。

- YG検査というものを知らずにいたため、先生のお話は参考になりました。タイプ別でみていくとより適切な指導が生徒にできるようになります。本校でもYG検査を取り入れて指導の手助けとしていきたい。(神奈川県教員)
- 統計的な数字に基づいて、タイプ別の指導が明確で、今後の指導方針に大いに参考になりました。通級している子ども達に、どのタイプか考えて見て、さっそく実行していきたいです。(静岡県教員)
- 検査することによって客観的に捉えられるという点で良いなあと思いました。今対応している子どもの現状とマッチしている例などもあり、2学期から子どもと話し向き合ってみようかなあと思いました。(神奈川県教員)
- 私の周囲の不登校の子ども達もEタイプの子が多いように思います。もっともっと親の関係、教師間の関係を作りながらその子に一番いいと思われる方法を実行していきたいと思

ます。3年という数字、中学校に入ってくるころには長期になっていて…。もっと小学校と連携していきたいと思います。

■「不登校と児童生徒のストレス」

梅垣 弘 弘南山大学教授・精神科医

児童・生徒にとって、学校や家庭の生活の中で何がストレスになるのかは個人差がある。不登校になる児童・生徒には、潜在的なストレスになる事態に既に置かれている。その意味では、教員や親にとっては何でもないことであつたり、喜びであつたりすることが、「その児童・生徒にとってはどうなのか」の視点に立つことが重要だ。

また、不登校の経過とストレスとの関係を見ると、▽1次ストレス期（前触れ期）では、親や周囲から見えにくいストレス状況に遭いながら、頭痛や腹痛などを訴え、欠席しがちになる▽2次ストレス期では、学校を休み続けていることへの後ろめたさや自己への自信喪失感が新たなストレスとなっている▽3次ストレス期では、学校や教室、友達、学習の遅れなどへの高い不安・緊張感がある。周囲がどのように反応するかなどに鋭敏になり、周囲の想像以上のストレスを受けている。

不安・緊張感の高い不登校の児童・生徒には、十分な信頼関係の基に教え導くことが重要だ。

- 不登校生徒の状態をどう見るかの内容は目からうろこでした。前向きに見るとまた違った展開が期待できそうです。教師がどういう指導をしたかではなく、生徒がそれをどう受け止めたかを重視することも今後忘れないようにしたいと思います。（福岡県教員）
- ストレスについてよく理解できました。ストレスを子ども達がどう対処していくか、その支援の方法を考えていくことがこれから求められるのだなと実感しました。（神奈川県教員）
- 終始笑顔で穏やかな語り口に先生のお人柄の良さを感じ、受容ということを体で示していただけたと思います。また「誠実」ということは、こんなにも人をひきつけるのかと改めて思いました。私も誠実な人になりたいです。（静岡県教員）
- 様々なストレスにさらされている子ども達だが、ストレスに向かっている耐性を幼児のころからつけていくことが家庭教育や学校・園の中でとても大切なのだと思います。この理論を現場でどう生かすかが、教師にこれから問われることだと思っています。（岡山県教員）

■「不登校にしない幼児期の配慮・問題行動のなおし方」

金子 保 国際学院埼玉短期大学教授

不登校とのかかわりが深い幼児期の子供の問題行動には、言葉がなかったり、少なかったりする子供、すぐに自分の好きなことを始めてしまう自己中心

的な子供など学級崩壊・授業困難をもたらす要因になる子供もいる。

学級崩壊は小学校低学年と高学年に多いが、高学年での問題は、教員の指導力の不足との関係が強い。一方、低学年の学級崩壊は基本的な生活習慣、例えば、授業中は椅子に座って、教員の話を書くなどの習慣が身につけていない子供の問題がある。さらに、学習障害などの問題行動児の治療指導が成功していない場合がある。

学習不適応や学校不適応になりやすく、治療が急がれるものとしては、小児自閉症、小児失語症、場面緘黙、学習障害などがある。このうち、小児自閉症では、2、3歳の頃に「高い高い」などのような遊びで愛情の欲求を満ちし、笑わせるような関わりから情緒を発達させ、発語を増やす。さらに、心情の発達が年齢相当になったら、就学に向けた数や文字への関心を高めるような教育的治療を進める必要がある。

- 幼児期に私などは当たり前で過ごしてきた保育園や家、近所での遊びが今のあたり前でなくなってきた現実をもっとよく見つめたいと思いました。愛情を受け、楽しく遊ぶことそのものの大切さを考えさせられました。（神奈川県教員）
- 幼児期の経験が大きいことがよくわかりました。日頃の生活を見直していく必要があると思いました。（新潟県教員）
- 1年で担任をしていますが、幼稚園・保育園の先生に困っているという必ずといって「一斉保育はしています」という話になります。何でだろう？といつも思っていました。今日わかりました。これと同じで私の指導も“魂入れず”になっているのだろうと反省です。ポーリングやサイコロ遊びやってみようと思います。（岡山県教員）
- 乳幼児期のかかわりの大切さを再認識すると共に、保育士の仕事の責任の重さ、使命の重さを感じました。教えていただいた考えるヒント、文献などを参考にさせていただき、勉強していきたいと思いました。（東京都保育士）

■「“難しい”親とのかかわりの方法」

菅野 純 早稲田大学人間科学部教授

もともと「難しい親」はいない。だが、場面によって、教員との関係によって、そのように位置づけられる。

難しい親のタイプには、▽子供を放任、無関心▽思いこみが強く、教員の話を書く耳を持たない▽被害感が強いなどがある。被害感が強いとは、教員がよかれと思って投げかけた言葉をマイナスに受け止めること。

このほかのタイプとしては、▽無口で何を考え

ているのか分からない▽価値観が大きく異なっている——などがある。

親と教員の価値観が大きく異なっているケース、例えば、級友をいじめたり、暴力行為をしたりするので、担任が両親と学校で面談をした時、反省文を父親に見せたら「字がよく書けていますね」と答えた。

このような答えを聞いて、担任は「自分は何をやっているのだろう」とアイデンティティの危機に立たされかねない。

このような親に対する面談のコツは、親の背後にある、そうせざるを得ない背景に配慮し、時間をかければ心が整理されると考えることが大切。

さらに、親が集団で「担任を替えると言ってきた場合には、個々の親の言い分を聞いて、声の大きい人に押されていないかを判断し、親の間での意見の違いを聞き取る方法もある。

- すばらしい話でした。3日間参加しましたが、一番心に残るお話でした。大切なのは相手への思いやり、暖かさだとあらためて思いました。来年も是非講演していただきたいと思いました。(東京都教員)
- 年々保護者とのかかわりの難しさがありましたが、具体的な話が聞けてよかったです。“ゆとり”は自分もなく親として反省します。親の気持ちになることが大事ですね。(神奈川県保育士)
- 菅野先生自身の取り組む姿勢の長年の過程での戸惑いや得心が自分にもスーッとはいってきました。その人の側、その人の事を考えていくと、自然に出る行動とでもいうのでしょうか、その視点で対応していくことが、人間関係にとって大切なのだと痛感しました。(山形県教員)
- 最近、念に一回くらい難しい親だと思える人にあたってきたが、最後まで平行線に終わっていたが、先生の話聞いて少し理解でき、話し込まなくてはならないと思った。(京都府教員)

■「LD・ADHDと呼ばれる子供たち」

上野一彦東京学芸大学副学長、日本LD学会会長

文科省の全国調査(昨年10月)によれば、通常の学級に通級している児童・生徒のうちの、LDは4.5%の割合で、ADHDが2.5%の割合で存在していると考えられる。LDの特徴は読み・書き・計算などの学力、聞く・話す能力、社会性・運動能力などの面で困難を抱えている。

LDの症状の重さを決める要因としては、▽知的発達のレベル▽対人関係の能力を軸とした「その子のつまずき」の領域の確認などが重要だ。

LDなどの子供たちの求めるこれからの教育は、学習の違いへの対応、個々の子供のニーズに応じた教育の提供、多様な選択肢を用意した上での柔軟

な選択の可能性があることが求められる。

LD・ADHDの子供を理解するという事は、子供との接し方やつきあい方を知ることであり学ぶことでもある。

- 感想ですが、最近何かと不適應な子どもが増えたと、LDかもとかADHDかもといわれる方が増えたような気がして…。LDだからADHDだからの前にこういう子への対応というのは全ての子に大切なことではないかと思えます。(福岡県教員)
- 障害に対する理解は障害を知ること以上に障害のある子どもの人間性をいかに捉えるかの方が大切だと思っている。障害の特徴だけが理解できて、どう対処するかに取り組みない教師だと特別支援教育の実践は難しい。(長野県教育委員会)
- 上野先生の特別支援にける熱意が大変よく伝わってきた。各校に特別支援教室を設けるにはスタッフなどの体制を組むのにまだ時間がかかると思う。形だけ整えるのではなく内容を充実していき、一人一人の子どもにニーズにきちんとこたえられるような学校教育の体制の必要性を国が真剣に考え、力を入れて取り組んで欲しいと思う。(東京都教員)
- お話を伺いながらLDやADHDが疑われる子どもの姿が頭に浮かび、現実の学校生活の中でそれらの子ども達が理解を得られないまま、「変わった子、こまった子」として置き去りにされている現実に思いをはせました。教員の中にもまだまだ知識不足があると思います。このような研修が広く行われることを望みます。(埼玉県教員)

■「ADHDの理解と支援①」

渥美義賢 国立特殊教育総合研究所情緒障害教育研究部長

医学会ではADHD(注意欠陥多動性障害)は、脳機能の障害と考えられているが、家庭でも学校でも理解が得られず、子供は辛い思いをしていることが多い。本人が変わろうと思っても変われないことを、周囲が十分理解することが大切。多動は加齢に伴って減退することが多く、不注意は成人まで残ることが多いが、適切な対応により、対処の方法を身に付けることが可能だ。

加齢によって目だってくるのは、周囲の不適切な対応によって、反抗的な行動や他人をいじめるなどの二次性の障害だ。

- 以前担任した男子を思い出し、LDと親は言っていたけど、AD/HDもあり、てんかんもあった子でもっとこのお話を伺うのが早かったらと思い出されました。ありがとうございました。(東京都教員)
- AD/HDの診断がかなり難しいものを感じた。

グレーゾーンの子は多くいると思うが、診断される子は慎重に見ていくことが必要であると思った。多面的に見る必要がある。(兵庫県教員)

- AD/HD の問題行動に対して一時的な症状、二次的な症状という見方があることを知りました。好ましくない行動としてすべて一緒に考えていました。大変参考になりました。ありがとうございました。(東京都教員)
- 基本的なことがよく分かっていなかったため、今回の研修に参加しました。色々言われていることが、少しわかったような気がします。幼稚園なので判定しずらくわかりにくい部分の時期や、多動が少しずつ収まっていることで保護者が安定するものの、やはりどこか違うという部分を、直視せずこれも今に変わるとする部分の難しさがあります。(神奈川県幼稚園教諭)

■「ADHDの理解と支援②」

花輪敏男 国立特殊教育総合研究所情緒障害教育研究室長

文科省が打ち出した特別支援教育にあるとおり、これからは、1人ひとりに特別な配慮をしていく学校に生まれ変わることが必要。二次障害として、不登校や非行になっている場合があり、高校中退者の中にADHDやLDの子がいると思われる。生徒指導にADHDやLDの視点を持つことが大切だ。

学校の対応としては①成功体験を増やし、得意なことを伸ばす②他の障害や問題との関連や同級生との関係をつかむ③改善する目標は1つに絞る④刺激が少なくなるよう工夫する⑤カードを使うなどして、授業展開の見通しを伝えておく⑥保護者・医療・福祉機関・地域の連携など——などをあげた。

- 具体的な対応が多く盛り込まれていて、これからの対応の仕方への大きな指針となりました。花輪先生の特殊教育への熱い思いが伝わってきました。他の保護者への啓発、他の児童生徒への啓発の部分の話がもっと聞きたかったです。(千葉県教員)
- 明日から使える学校・学級でのかかわり方をお話しいただきありがとうございました。できない子と見るのではなく、できることを伸ばしてやる、できるように細かなステップを工夫すること、具体的に見通しがもてるように話すなどAD/HDの児童の気持ちの安定に努めることが大切であることがわかりました。(愛知県教員)
- 自分の園にいるADHDの子についてのかかわりをどのようにしていったらよいかわからなくてこの研修を受講したので、大変具体的な内容でよかった。(静岡県保育士)
- 少し勉強し始めたところだったので(自分なりに知識がある程度あったため)よりわかりやすかった。なるほどと思えるところがあった。(静

岡県保育士)

第13回教師&専門家のための不登校問題研修会 データ

1. 学校種別参加状況

小学校	346
中学校	233
高等学校	143
幼稚園	134
保育園	96
養護学校	37
教育委員会	30
学生	17
教育センター	8
適応指導教室	8
児童相談所	3
スクールカウンセラー	3

2. 都道府県別参加者数(申し込み数名)

秋田	2	岐阜	11	愛媛	3
青森	4	三重	2	福岡	14
岩手	3	滋賀	9	佐賀	1
北海道	7	大阪	33	長崎	5
東京	187	京都	9	熊本	3
神奈川	161	奈良	5	大分	2
千葉	87	和歌山	7	宮崎	4
茨城	56	兵庫	6	鹿児島	3
栃木	41	鳥取	7	沖縄	5
埼玉	72	岡山	29	福井	5
群馬	36	広島	13	石川	7
長野	9	山口	3	富山	2
山梨	5	香川	3	新潟	28
静岡	60	徳島	1	福島	8
愛知	86	高知	12	宮城	12
山形	6	島根	2		

※勤務先データをもとにしているため、勤務先無記名の方はカウントしていません。

3. 年度別参加者数

	第10回	第11回	第12回	第13回
参加数	453名	439名	649名	1158名

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

新刊のご紹介

- ☆ 不登校の予防と再登校への支援 (田研出版)
金子 保 2,000円 (税別)
- ☆ 幼児の気になる行動解決支援の方法 (田研出版)
金子 保 2,000円 (税別)

- ☆ 不登校—その後 不登校経験者が語る心理（教育開発研究所）
森田 洋司 2,600 円（税別）
- ☆ 思春期のメンタルヘルス（北大路書房）
倉本 英彦 2,500 円（税別）
- ☆ 04 年度版総ガイド高校新入学・転編入（オムラ書店）
1,000 円（特価）
- ☆ 04 年度版中学卒・高校中退からの進学総ガイド（オムラ書店）
2,400 円（税別）
- ☆ 僕達が学校に行かなかった理由（オムラ書店）
池上彰述/牟田武生監修 2,000 円（税別）
- ☆ ひきこもり／不登校の処方箋（オムラ書店）
-心のカギを開くヒント-増補版
牟田 武生 2,000 円（税別）
- ☆ 社会的ひきこもりへの援助概念・実態・対応についての実証的研究（ほんの森出版）
倉本英彦／編著 1,600 円（税別）
- ☆ ネット依存の恐怖（教育出版）
牟田武 生 1,800 円（税別）

平成 15 年度 収支決算

収入の部（9 月 22 日現在）

①受講料（有料名）	6,353,000 円
②預金利息 15 円	
③平成 14 年度繰越金	2,051,767 円
④平成 14 年度決算終了後活動費	100,000 円
合 計	18,504,782 円

支出の部（9 月 22 日現在）

①ホール借料（機材借料、技術者料含む）	842,000 円
②講師お礼（100,000×9、60,000×1、150,000×2、10,000×3）	1,305,000 円
③講師交通費 （35,000×1、25,000×1、10,000×1、7,000×2、5,000 円×3、3,000×4）	111,000 円
④スタッフ用役費及び交通費	2,295,000 円
⑤ボランティア交通費	291,383 円
⑥食事代（講師・ボランティア昼食、打ち合わせ費用含む）	351,971 円
⑦郵送費	2,333,344 円
⑧印刷費	
内訳 パンフレット	415,000 円
封筒	340,000 円
講義ノート	1,702,428 円
他印刷物（受講証他）	300,972 円
ラベル出力・名簿管理	292,412 円
消費税	151,418 円
⑨雑費（事務用品費を含む）	588,926 円
⑩事務用品費（OA 機、ソフト代等）	588,101 円
⑪事務諸経費	200,000 円
⑫源泉預かり	139,997 円
⑬支払い手数料	55,685 円

⑭第 13 回研修会参加者への報告及び研究会通信発送費	250,000 円
⑮決算終了後の活動費（交通費・電話代等）	200,000 円
⑯返金（キャンセルのため）	246,400 円
⑰支払利息	3,194 円
⑱平成 16 年度 DM 発送費用	2,000,000 円
⑲平成 16 年度パンフレット作成費	500,000 円

合 計 **15,504,231 円**
収入－支出＝3,000,551 円は次年度繰越金とする。

☆☆研究会事務局だより☆☆

主催団体のことについて

今年からまた 6 年ぶりに不登校問題研究会による単独主催に戻りました。母体の教育研究所が NPO 法人になったことにより、文部科学省や全国都道府県教育委員会連合会の後援が得られるようになった為、経理・事故などの責任主体を明確にするため実質主義に戻しました。5 年間にわたり名義を貸してくれた「社団法人青少年健康センター」には心から感謝しています。特に事務局長の監物和夫先生には大変お世話になりました。ありがとうございました。

大阪会場の開催について

生徒指導の研修会は学校現場にとっては大変必要なことだけれど、「予算が削減されて交通費が出ないために研修会に参加できない」という声から西日本の地区から大変多く聞かれるようになってまいりました。そこで今年度からは大阪会場（よみうり文化ホール・豊中市）でも開催することになりました。ぜひ、関西・中国・四国・九州地方の方々便利になりましたのでご参加ください。

あの富山・宇奈月ニューオオタニホテルでグループワークショップに参加しませんか？

ニューオオタニホテル社長 松岡啓一氏の全面的な協力によりグループワークショップを 12 月 1 日、2 日、3 日に開催することが正式にきまりました。

我が国を代表する名門ホテルニューオオタニグループが青少年の健全発展に貢献するために協力します。ゆっくり名湯に浸かりながら、二泊三日のグループワークショップに参加して、頭と身体で覚える研修会に参加してみませんか？

生徒指導のことで頭から離れなかった対応の道がきっとみえてくるはずです。そして、全国に研究仲間を作りましょう。詳しくは夏の研修会または追って希望者にはご連絡します。

不登校の子どものタイプ別判定と対応方法を コンピューターによって判断するためのCD-ROM 販売延期について

NPO 法人教育研究所では過去に通所してきた不登校の子ども達が行った心理検査（YG 性格検査・不安要因検査）を分析し、その結果、子どもをタイプ別におけ、それぞれの子どもの状態像に応じた対応を行って多くの成果をあげてきました。

「タイプ別判定と具体的な対応方法をコンピューターで処理するためのプログラムソフトをこの数年間にわたり研究開発してきました。

昨年度、教育研究所に通所していた子どものデータ（150人）を基礎データとし、CD-ROMの試作版ができました。これは子どもたちがコンピューターの画面を見ながら、今の自分の心理状態を入力していくと、その子どものタイプ判定ができ、そして、保護者および教師の対応方法が詳細にわかるものです。

しかし150人という母集団のデータだけでは、すべての子どもたちの対応方法を判定するためには充分ではないことがわかりました。

そこで今年度行政の協力を得て平成15年度の長期欠席児童生徒の詳細な実態調査を行うことになりました。この調査では数千人というサンプル数が得られ、その調査結果を基礎データとして、今まで開発してきたプログラムに組み込むことによって、さまざまな不登校の子どものタイプ判定、対応方法が可能になると考えられます。

ご利用を検討されている教育委員会、学校、相談機関の方々にはご迷惑をおかけしますが、もう少しお待ちください。なおCD-ROMは来年度の春の完成を目指しています。

編集後記☆☆☆☆☆

◇先生が家庭訪問しても、「本人が会いたくないと言っています」と母親に拒否されれば、不登校の子どもの家庭訪問はできない。しかし、実はその母親による子どもの命を奪うような虐待が連日繰り返されていた。大阪岸和田で大変不幸な虐待事件が起こったことは記憶に新しい。

不登校は学校を年間30日以上、特別な理由なく休んだという状態像である。その中身はひきこもり・怠学・非行問題・いじめやADHDやLDといった軽度の発達障害も含まれるが、虐待という問題も考えなければならない時期に来ている。

不登校イコールひきこもりと言う認識を拭い去ることが今、児童・生徒指導の現場では求められている。そのために広範な専門知識が求められる。

私たち事務局も緊張感の中に張りのある時を迎えた。今年も各会場で皆様に会えるのを大変楽しみにしています。（牟田）

◆平成15年度の夏期セミナーでは研修会史上初めて（過去13年間で）満席のためお断りという事態が起きました。それだけ多くの方々がこれらの問題に関心を示していらっしゃるということだと思います。

私たち研修会のスタッフも普段はそれぞれ不登校の子ども達とかかわるケースワーカーをしています。研修会に参加される先生方ともっと近い距離でお話ししたり情報交換したりする機会が増えたらと思っています。今年は12月に富山県の宇奈月でワークショップを企画しています。じっくり向き合ってお話しする機会になればと思います。今年もどうぞよろしくお願い申し上げます。（西村）

◇研究会の受付が始まりました。今年から7月に大阪会場での研修を行うことになり、いつもより早いスタートとなります。研修会の事務局にボランティア参加し、実質運営母体となっている教育研究所は今年から運営形態をNPO法人と改め、より公共的な機関との連携を深め、不登校・ひきこもりの子ども、親などへ向けたさらなる援助活動を展開していくことになりました。

不登校（学校へ行っていないという状態像を持つ子ども）の状態像もさまざまであり、支援者がお互い、より広く様々な形で援助体制の連携をはかり、一人一人の子どもの状態像と合わせ、見守り育てられる体制が必要です。

私たちが考えなければならないことや、やらなければならないことは沢山ある、そんなことを実感しています。（田村）

◆私の体重は？kg、このお菓子は1,500円、今日の気温は25度、私の心の疲れ具合は？彼の愛情の強さは・・・？うーん、心の状態を測るということは非常に難しい問題です。私のように単純な人間でもうまく表せないというのに、不登校の子どもの複雑な気持ちをどのように表現すればよいか、難問です。教育研究所30年来のノウハウと子ども達の苦闘の末、来年の春ごろには、子どもの心理状況と子どもに応じた対応方法が分かるCDが完成する予定です。お楽しみにお待ち下さい。（久玉）

